

オアシス21

症 例 概 要 利用者氏名：Y・M様（女性・80代・要介護度4）

病名：右脳出血術後（左麻痺、嚥下障害、高次脳機能障害）高脂血症、脂質異常症、僧帽弁閉鎖不全症、陳旧性下壁梗塞の疑、胆嚢結石、両変形性股関節症、右卵巣嚢腫の疑惑

平成30年10月、脳出血発症、T病院入院開頭血種術後、経管栄養・ADL全介助で回復期病棟を経てオアシス21に入所。ご本人の自宅へ帰りたいという願いと、家族介護が困難な状況に対し看護、介護、リハ、相談員、ケアマネなど多職種で連携。リハビリと家族指導、住環境の整備で在宅復帰が実現した症例。

内 容

平成31年4月、オアシス21入所当時はADL全介助、認知機能面の低下から、辻褃の合わない言動や注意力の低下がみられていて、日常生活全般に介助が必要な状況。左麻痺と高次脳機能障害の影響により他に注意が向くと姿勢保てず左側に倒れそうになったり、必要な動作の手順を忘れ一つずつ手順の確認が必要でした。

食事は経口摂取可能でも、嚥下機能低下がみられ誤嚥性肺炎のリスクが高い状態で食事介助も必要でしたが、ご本人の自宅へ帰りたい希望が強く、在宅復帰を目標として多職種連携のチームで取り組んでいました。

在宅復帰を目指す中での一番の問題は、ご主人が心筋梗塞の既往で無理ができないこと、次男は仕事で不定休、近くに住む長女も仕事のため平日が不在であることなどから、ご家族が在宅介護に消極的であったことでした。

ご本人の自宅へ帰りたいという強い思いとご家族が消極的であるギャップを埋めるためには、ADLの向上と在宅復帰後の具体的なサービス提案、在宅環境の整備が必要不可欠でした。

在宅復帰を目指した日常のケア、リハでは全介助であった車椅子移乗もスライディングボードの使用で自力で可能になり、食事についても、食べるスピードの声掛けや食形態の見直しで、見守りの中で自力摂取が可能となりましたが、トイレ誘導については介助が必要で、在宅復帰後はご家族のケアが必要な状態。

同時にご家族へはリハビリの成果を日々お伝えすること、面会時に合わせて外出を行うことで、少しずつ前向きに考えていただけるようになり、更に介助方法の指導や栄養指導、福祉用具の選定、家族介護では入浴が困難であるため、オアシス21の通所リハとほっと館訪問介護を利用することを提案。最終歴

にはケアマネとの連携もあり自宅への在宅復帰が可能となりました。

今後はリハビリとご家族の介護負担軽減を考え、オアシス21の入所と自宅での在宅サービスを交互に利用することでオアシス・自宅のリピート利用につなげることができました。

ご本人の家に帰りたい気持ちをどうしたら実現できるかを多職種で検討を重ねたこと、また在宅サービスの調整がスムーズに行えたことで、ご家族は在宅生活を前向きに考えることができたと考えキラキラ介護賞に推薦いたします。